

上代倭繪景物畫の研究 下

家 永 三 郎

(三) 秋の景物畫

七夕 七夕の繪は月次繪の中最もよく畫かれたものの一つである。「七月七日

七夕祭れる家あり」「七日ゆうべをとこあまた居てあまのかはら見たる」「七月七日女ども庭に出て尾花にいとかけたり」など、銀河輝く秋空の下、七夕の祭具を中心に集ふ男女の群を描いたものが最も普通の圖様であつたらしい。これに次ぎ、「七月たなばたまつりてたらぬに水いれてかげみる。天河かげをやどせる水かがみ云々」の如きもの、「七月七日女庭におりゐて七夕まつる。男來てすい垣のもとにたてり」の如く七夕の行事と男女の情事との結合せるもの、「七月七日庭にことひく女あり」、「七月七日女の河水あみたる所」の如く或は琴を弾じ、又は水に浴せる女を配したるもの等があつた。何れも風俗畫としての色彩豊かなものが多かつた。

* 五八、六九、一一一、一三九、一八九、三四一、四四二、四八〇、四九八、五七一、五九〇、五九九、六〇〇、六五〇、六八八、六九九、七一五、七五三、七七三、八〇七、八三三、八八三、九二〇、九四八、一〇一九、一〇四四、一一三七、一一七〇、一一九六、一二三〇、一二七八、一三二三、一三四〇、一三六二、一四〇五、一四五二、一四七八、一五六七、一六八〇、一七二二、一八四四、一八九六、参考八、参考二七、

秋宴 「釣台秋宴。閑見釣台造化功、更疑美構在虛空。龍舟秋路凌波到、

上代倭繪景物畫の研究

雷鼓晚聲渡水通云々」の詩を題した繪がある。壯麗な釣殿に於て貴紳の宴が行はれ、その下の池を龍頭鰐首の船が奏樂しつつ進むさまを畫いたものであらう。駒競行幸繪を以てこれを想像すべきである。

* 九六八、二〇七七

盆 (七月) 「十五日ぼんもたせて山寺にまうづる人」と題する繪が一つある。

* 一〇四五

駒迎 駒迎とは内裏駒牽の爲めに信乃國等の牧より貢せらるる馬を馬寮の官人が逢坂關に迎へる儀を云ふ。従つて駒迎の繪には逢坂の關を背景として駒迎の使又は見物の人々が畫かれた。「八月あふ坂の關に駒むかにへゆく」「八月駒をみる女車あり」とあるのがそれで、「八月十五夜こまひき。けふしまれ相坂山のやまのはにまづいできぬる望月のこま」とあるによれば、夜景満月の下の相坂山が畫かれたこともあつたらしい。望月とは駒の產地たる信乃の牧の名で、これを満月とかけたものである。又「栗田山より駒牽く、そのわたりなる人の家に引き入れて見る所あり」「こまひきしらかはにしたるをかうする所。白河に水かふ青の駒ひきを云々」の如く背景を逢坂以西にとつたものもあつた。

* 一九〇、九二一、九四九、一〇二〇、一〇四六、一一四九、一一九〇、一二三一、一三二四、一三六三、一五五三、二二一四、

月 「八月十五夜」と題するのが月の繪であることは勿論だが、伶隴たる月

一五

光を詠ただけの歌が附せられてゐるもの多く、構圖の明でないものが尠くない。圖様について少し詳しい説明のあるものを挙げると、まづ月と雁とを畫いたものがある。「秋夜宿野亭」于時天晴月明、終夜不眠。鴻雁叫天、蛭蟀吟床。「八月十五夜したる所あり、雁飛べり」の如きがそれで、次に月見の人物を畫いたものがある。「八月十五夜も月にむかひてかゆくへるかたかかけるところ」は屋内に於ける月見、「道行人馬にのりてむちして月をさして見る」「月に山路をゆく人ある所」「月夜に笛ふきて男ゆく」は野外に於ける月見を夫々畫いたもので、何れも男性を配したのであるが、これに對し「家にをんな月を見る」「やまざとにをんなのつらづえをつきて人まちたるかた。すみしれる月とみづとにこととはむひとまつよひの秋のやまざと」の如く女性を配したものと及び「人の家の前近き泉に八月十五夜月の影うつりたるを女共見る程に、垣の外より大路に笛吹きて行く人あり」「八月十五夜人の家に蓮有、木のはうかぶ、月の影落ちたり。男女心々にあそぶ。すだれのとにゐてものがたりするもあり」「秋の夜女きんひく、まらうどきてすのこにゐてけさうす」の如く月下に於ける男女の會合を畫いて凄艶なる風俗畫を構成してゐるものもあつた。これに類するものに釣殿に於ける秋宴を圖したものがあつた。「人の家のつり殿にまらうどあまたありて月をみる所」の如きで、これは秋宴の圖を夜景にしただけの相違である。その歌に「水の面に宿れる月の云々」とあり、水にうつれる月影が畫かれてゐたらしく、その點「女□^(レカ)」の池のほとりなるたいにむ□^(レカ)て水の底を見る。月かげのみゆるにつけてみなそこをあまつ空とやおもひまどはん」船にのりてありて八月十五夜「秋の月おもしろき池ある家ある所」等の水邊の月を畫いたものと同じ趣を出さうとしたものであらう。因に前に倭繪では水に映じた物影は實際には畫かれなかつたであらうと推定して置いたが、源氏物語花宴に「かのしるしの扇は(中略)かすめる月をかきて水にうつしたる心ばへ云々」とあるし、後世の作品ながら石山寺縁起紫式部參籠段にも水上の月影が畫かれてゐるから、月影のみは例外であつたとしなければならぬ(源氏物語角總に

「やり水にすめる月の影さへゑにかきたるやうなるに」とあるも之を傍證する)。次に水邊の月に對するものが山の月である。^{***}「八月十五夜。もとせのちの秋ごとにあしびきの山のはかへずいづる月かげ」は山の端より上る満月、「山端に月いらんとするほどかきたる扇」は將に山陰に沒せんとする月を夫々畫いたもの、又「山のみねにゐて月見たる人かきたる所」は山顛の月に更に月見の人物を配した高雅な圖様である。清凉殿にも昔金岡が「遠山の在明の月」を畫いた畫圖の障子があつた由平家物語に傳へてゐるが、果してかかる畫障が實在したかどうか、確實な文獻は存在しない(猶續往生傳によれば、阿闍梨延慶は「抄三出諸大乘經家章疏中諸法空之文、推之於屏風、又畫三月輪、安於枕上」^{***}んじたと云ふが、これは月輪觀をなすためのものであつて、佛畫の範疇に入るべきものと思ふから、今は考察の外に置くこととする)。これらの風趣豊かな月次繪の月は今全く傳はらないけれど、唯上代の終期に作られた平家納經に嚴王品表紙の山の端より見ゆる満月の半影、嚴王品本文の下繪、陀羅尼品本文の下繪の満月の如き雄渾なる月輪圖の筆致のとゞめられてゐることは誠に幸と云はなければならぬ。尤もこれら下繪の月輪は或る程度逆圖案化されてゐるのであつて、其處には扇面圖との關係がある様に思はれ、高麗を経て宋に輸出された扇面に「以銀泥爲雲氣月色之狀」つた「極可愛」きものものあつたと云ふ事實がここに考へ合されるのである。^{***}

* 二七九、二九九、三五九、三六〇、四四八、四五九、四六〇、四九九、五七二、五七三、六〇五、六三三、六四九、六七四、七一七、七五六、七七四、七九七、八三五、九五六、九六〇、一〇〇〇、一一七一、一三四二、一三四九、一三七五、一三七六、一三八三、一五六八、一五七六、一七二三、一七八〇、一八四六、二〇三五、二二〇九、二二六五、參考九、

** 三五九、三六〇、四四四、四六五、四八一、五五八、七三三、一〇四七、一一五〇、一一五八、一二七九、一四二六、一五六四、參考四〇

*** 六一七、六八九、九八六、一六〇三、一七〇五、一七三〇、二三五九

**** 一九八五

志賀山越 志賀の山は京より近江乃至それ以東に出る爲めの殆ど唯一の通路

として都人に親まれてゐた。志賀山越が旅するものにとつて深い印象を残す所以である。圖畫化された志賀山越は「春の霞のたてるなるべし」の歌を附したのもあつて季は春秋に涉つた様であるが、右兵衛智忠公新調屏風には九月、康保四年源高明大饗料屏風には十月に配せられてゐるから、今秋の季を主とした畫題として取扱つて置く。その構圖は「人しれずこゆと思ひし足引の山下水にかけはみえつつ」の如く山の傍を行人の歩を運ぶ處、「九月志賀の山越の人々山風の風にもみぢのちる時はさゞ波ぞまづ色づきにける」の如く紅葉の亂れ散る街道を旅人の群の過ぎ、彼方に落花泛べる湖水の開けた處などであつた。

* 一九四、八九一、八九二、一〇五〇、一二〇〇、一三二五、一三六四、

序に山越の圖として「遠き山を人こゆ。こしかたを八重の白雲へだてつついとど山ぢの遙かなるかな」「人山をこゆるに前に橋あり。橋くちてよくべき道もなかりけりみねより渡る雲ならなくに」などと云ふ類のもののあることを附説して置かう。これらは白雲覆ふ深い山中の旅人を畫いたものであつて、かけはしなどによつて其險阻なることを表現してゐたらしい。

* 四七〇、五四九、一七〇三、一七六六、一七七〇、

擣衣 この畫題は砧の音を意味するものであるが、この場合砧打つ人物を直接に畫くことなく、擣衣の時處にふさはしい風物又はこれを聴く人物の姿勢等によつて間接に音を表現しようとしたものが多かつた様である。恰度時鳥の聲を示さうとしたのと同巧異曲で、倭繪の優れた表現法の一に數へることが出来る。例へば「たび人のきぬうつこゑをきゝたる」の如きがそれで、「月夜に衣うつところ」「八重葎生にし宿にから衣たがぬふとてかうつ聲のする」とある様に月明の夜にむぐら生ひ茂れる茅屋一字を示して砧の主の存在を暗示しようとしたものではあるまいか。

* 一九三、二一一、三〇三、五七五、七二一、一〇四九、

露 「綴草露垂珠」「竹のはに露いとおほくおきたるかた」「九月九日露み

だる所」など葉上に結ぶ露を畫いたものがある。其内には「螢飛三白露」と螢を添へた例もある。露の如き微妙な自然の風趣をものがさず畫いたところに繊鋭な美的感覺をみるべきであらう。これも亦「人の家の妻戸よりおとこのいづるに、草のうへの露おほくありあけの月のこりしに」と云ふ様に人物と配合されるものが忘れられてゐなかつた。但し露を如何に形象したか實際の手法は分らない。

* 五一九、九六二、九六七、一三七三、一五九七、一七七九、二一二四、

前栽 「八月人々あまた人の家の花ををるほりうゝる所」とある様に萩などの秋花を野より堀り來つて庭に植ゑるところを畫いたものがある。「八月十五夜前栽うゑたる所」の題から考へると、月明の夜景の場合のあつたことが分る。これを人事と結びつけて「前栽植させて男女のみたる所」と云ふ風俗畫ともなり、又「女房男方として前栽あはする所あり、たゞひとつならず、かざしに女わらはゐたり」の如き前栽合の行事を畫いた作品ともなつた。

* 一四一、三九三、一〇九八、一一二一、一四〇二、一五四九、一七九四、参考二八

秋花見 秋の野は秋の美を競ふ晴の場所であつて、都人は春花見に出でたと同様、秋の花を見んとて野に遊んだ。秋花も亦これら花見の人々を中心として畫き出されたのである。「をとこの萩の花見たる所」「女どもあまた秋の野にゐて花見る所」「馬車にのりて人おほくさまぐの花もさきみちたり」「野の花を馬にのりたる人三ばかり見てすぐる所」の如く、萩の花咲きみだれた野の中に徒歩、騎馬、乗車の男女の群を配し、時には「嵯峨野に花みる女車あり。なれたるわらはの萩の花にたちよりておりとる所」の如く花を折る人物や、「八月嵯峨野に所の衆ども前栽ほりに」の如く草花を堀る人々なども畫かれた。この後の二例にある様に常に嵯峨野がその舞臺に用ゐられたのである。

* 一一二、三五三、三九四、四五一、五三六、五三七、六一六、六五一、七三二、
七五八、八八四、一〇七六、一一三〇、一一七三、一三四八、一三七四、一四三二、
一四五三、一五六二、

萩 前のと關聯し、特に萩、女郎女、尾花、刈萱等を主題に立てた作品がある。まづ萩は「風さむみ衣かりがねなくなべに萩の下葉も色づきにけり」「秋の風萩のはをふく」などとあるによれば、花と人物とのはなやかな色調から成る前の畫題に對し、秋風渡るものさびしい秋野が畫かれてゐたらしい。

* 一〇三、一六三、二四三、三〇四、三四三、四一五、四二四、四八四、五七六、六六〇、六七三、七〇〇、

女郎花 「秋の野のちぐさの花は女郎花まじりておれる錦なけり」の如く秋野をかざる女郎花を畫いたものや、「女郎花折て硯のもとにおける男」の如く室内に折り挿されたのを畫いたものがある。

* 六八、二四一、三〇一、四二五、四三二、四四三、五三八、五八二、九八五、

花薄 「秋野に女どもあまたあそびけるに薄の風になびく所」の如く秋花見圖として畫かれたものと、「人の家のすだれのもとに女出わたるに垣の下に男立てせうそくいふなる、垣のつらに薄おほかり」の様に戀人訪問の情景をかざるために垣に生ふる花薄を畫いたものと相半してゐる。徳川家本源氏物語繪詞には「かれがれる前萩の中にをばなものよりことに手をさし出てまねくがかしうみゆるに、まだほに出さしたるも露をつらぬきとむる玉のをはかなげにうちなびきなど例のことなれど夕風なほあはれなりかし」(寄生)と云ふ本文によつて庭前の薄の一叢を畫いた一齣がある。

* 二〇八、三〇二、三五四、三六八、六五三、八〇〇、一三四一、二〇九七、

刈萱 「秋の野におとこ筭をまへにきてかるかやをかりたる所にこといふものを二をきたる所」と題する作例が一あるのみである。

* 二〇八九

小鷹狩 小鷹狩とは冬の鷹狩を大鷹狩と云ふに對して、秋のを呼ぶ名である(松屋筆記)。鷹狩は桓武天皇が延暦二年十月交野に行幸鷹を放つて遊獵遊ばされたのをはじめ、京畿の野に於て屢、行はれ、嵯峨天皇に新修鷹經の御製ある程であつたから、その行事が月次繪の内に重要な場所を占めるに至るは自然で

あらう。或は「花郎花おほかる野に鷹手にする人たてり」「秋の野に色々の花咲きみだれたる所に鷹すゑたる人あり」とある様に秋花咲競ふ野を、或は「田のなかにこたかがりしたる所」の如く秋田を夫々背景とした人物を畫いたものがあつた。「小鷹狩する野に旅人のやどれる所」と云ふ例もある。要するに秋野圖或は秋田圖の一特殊形態と云ふべきものであらう。

* 一五二、一九一、二四一、二六四、三〇一、三二七、三四二、四二五、四三二、四八二、五八三、六七六、七八、七九九、八〇八、八八〇、一〇四八、一〇九九、一一二、一二五八、一二八一、一二八二、一三四八、一三八五、一四七九、一五四八、

忘草 倭名類聚鈔によれば萱草の和名を「和須禮久佐」と云ふのであるが、忘草の繪が果して萱草を畫いたのかどうかよく分らない。「住の江のあさみつしほに御そぎして戀わすれ草つみて歸らん」とあるによれば、住吉の濱に摘草する人物を畫いたものであらうか。

* 九一、一八四、二三九、

鹿 鹿は獸類を畫くことの比較的尠い上代倭繪中にあつてもよく畫かれた對象であつて、秋の感傷的な氣分と結合されて文藝上で盛んに使用せられた故でもあらうが、又その女性的な風姿が造形美術の素材としても時人の好む處に合致したためと思はれる。「鹿の萩の中に立る所」の如く萩の花と組合されたものが最も多く、「秋の夜月あかき木のもとに鹿たてり」と月夜の鹿を畫いたものこれに次ぐ。「をとこたびのやどりに鹿のなくをきく」さまもあれば、「たまもるいへにひとしかのはむをしらでねたり」と云ふ野趣にみちたもの、「山里なる女鹿のねを聞て」の如く美人畫となつたものもあつた。平安時代の鹿の圖の遺作としては、鳳凰堂扇繪山水中に數頭の鹿が見え、又仁安元年十一月十八日の日附ある平家納經願文見返には浮雲の草原に立つ鹿一頭を畫いた優れた例があり、其他繪巻物類には隨處に畫かれてゐる。猶遼東陵壁畫四季山水に鹿の好んで畫かれてゐることは、其の倭繪との關係の有無は別として興味ある事實と

して聯想せらるべきであらう。

* 一〇二、一四二、二七六、三九五、六七七、七〇二、七五五、八二三、八七〇、
九三一、一〇六九、一一一四、一二八〇、一三四三、一三八三、一八九〇、二二六
七、参考七三

菊 菊は九月九日の節句を示す季の物であり、これ亦盛んに畫かれた題材である。「うすくこく色ぞみえける菊花露や心をわきておくらん」の如く色とりどりの菊に露おける所、又「九月九日に菊のわたおほひた」るさま、「九月九日老たる女の菊しておもてのごひたる」情景、「をんなのきくのはなみたる」ところ、「人家に男女庭の菊見た」る景色、「菊の花さきたる家に鷹すゑたる人宿かる所」「山ざとの人の家に菊の花あるじおりてつくろふ」光景など、菊花とこれに對する人物の種々の所作を配して畫かれた例が多かつた。その稍變化を求めた圖様に「雨の中に殘菊をみる」の如き雨中の菊、「月の下の白菊」の如き月光下の菊、「きくの花ひちて流るる水」を畫いた「水邊菊」などの圖がある。この場合にも「菊おほくおひたる河のほとりなる人の家に女どもおほくかはづらにいであそぶ」「やりみづのつらにきくさけり、をとこ文かくところ」の様に風俗畫的要素の含まれることを常とした。春日權現驗記教英得業の段の畫中の障子繪に小川の流に近く菊のむらがり咲くさまが畫かれてゐるのが、菊花圖の實際としては古い例に屬するであらう。枕草子に「ながつきばかり夜ひと夜降りあかしつる雨の今朝はやみて、朝日いとけざやかにさし出でたるに、前栽の菊の露こぼるばかりぬれかかりたるものとをかし」とあるは文藝的に表現された菊の美であるが、恐らくこれと共通の感覺が繪畫の内にも生かされてゐたのではあるまいか。

* 七二、九六、一四五、二二六、二四四、三六九、三九六、四四五、四六二、四八五、五二五、五二六、六二四、六五四、六七八、六九〇、七〇一、七三七、七五七、七七五、七八一、九二二、九五〇、九五九、一〇〇一、一〇二一、一一〇〇、一一一三、一一八五、一二四三、一三七七、一四四〇、一四八〇、一五七七、一六七三、

二〇九八、二二五一、参考二九

* 三〇七、七六〇、一〇一一、

*** 三三五、三五六、五三九、

*** 七三、二六七、四〇八、六一八、七三四、八〇九、一二五九、

秋雁

「うゑし袖まだもひなくに秋の田をかりがねさへぞなきわたるなる」の如く山田の上を飛びゆく雁の列や、又「旅行人あり、雁なく」「馬にのれる人ゆく、空の霧の中に雁なきてわたる、野に狩する人あり」の如くこれを見る旅人や獵する人も併せ畫かれた。その飛雁の列は「水くきの跡かとみゆる」(源順集) 如く點々と畫かれ、これに雲を書き添へることもあつたらしい。時には地上の景物を切斷して「雲をはるかにとびゆく」雁列のみを畫いた場合もあつたと思はれる。飛雁はこれを主題とするものの外、山水畫に情趣を加へる景物として屢々圖中に點出された。その濫觴は遠く正倉院御物蘇芳染螺鈿琵琶撥圖其他の唐繪に遡ることが出來、下つて鳳凰堂東面屏繪の山景、信貴山緣起、源氏物語、北野緣起等の如きに至る迄永く日本畫の傳統として踏襲されたのである。

* 二一〇、二二八、三〇〇、三三四、五七四、六七五、七五四、七九八、八三四、
九六三、九七四、九七九、九九三、一二八二、一五五二、二〇九三、二二三二、

霧 霧は霞と同一の氣象である様に、其繪畫的表現も同じ技法によつたと思はれる。さうして霞の場合と同じくその背後の山水を幽玄化することによつて倭繪にとり大きなはたらきをつとめた。「九月きり山をこめたり」「霧立て紅葉の木どもかくせる所」などは、山の紅葉が其上を覆ふ霧の皮幕の奥に淡く紅色をのぞかせたさまを畫いたのであらう。「河のわたりにふねあるところ。山路にはひとやまどはんかは霧のたちこめさきにいざわたりなん」は渡津に立つ旅人が彼岸の山にかかる霧を遠望する情景を畫いたものの如く、「霧ノ立隱シタルニ旅人ノアルキタルヲ書タル所」と記された例もある。稍變つた構圖としては「七月女共舟にのりて池にあそぶところ。はつ霧もたちそめにけり誰にかは

人渡るらむかさゝぎの橋」の如く、霧たちそめた池に女の舟遊するさまを畫いたのがある。

* 一四三、一四四、四四六、八七五、九三〇、九六六、一四三九、一四九四、一七〇七、

秋風 風を繪畫に表現するには風に吹かるる物によつて示す外ない。秋風はこれになびく秋草によつて靜な形に於て表現されたが、更に木の葉吹き散らす凋落の聲としては専ら松によつて示された。「人の家の池のほとりの松のしたに居て風のおときける。」とあるはその例である。又「松原にたてる松の下に落ちつる紅葉などかきとる人あり」の如きは松下の落葉によつて風を間接に示してゐる。

* 一五七、二四〇、三三三、三五二、五六四、七九六、一六二八、一七〇六、

紅葉 「はかなき花もみちにつけても心ざしをみえたてまつり」(源氏物語桐壺)「花もみちのおもひもみなわすれて」(更級日記)などの用例によつて知られる如く、花もみちと云ふ一の熟語によつて折節の感情や藝術的觀照が意味せられた程に、花即ち櫻と紅葉とは四季の風物中雙璧の位置を保ち、「春は花秋は紅葉」(長秋詠藻)と並び稱せられたのであつた。その圖様には、まづ「ながつきのつごもりにをんな車もみちのちるなをすぎたり」「暮秋もりのもとに車をとどめてもみちみる」「をんななどもみちひろふ所」「波近き山の紅葉さかりなる所を人の馬にのりて」「九月卅日の日男女野べにいでてもみちをみる」の如く山又は野を男又は女、又は男女が乗馬、乗車、又は徒歩にて過ぐる情景を畫いたものがある。秋花見等と同じ型式の紅葉見の構圖である。「紅葉のもと行くかたかける」「旅人」も畫かれ、その旅人が紅葉「散りかかれればあふぎて立て」る場面もあれば、「紅葉の下に宿りたる所」もあつた。多くは紅葉の散りがたが選ばれ、「紅葉はの散しく時は行かよふあとだに見えぬ山路なりけり」の歌から想像すれば、樹間の地上が一面に落葉によつて埋められた光景も畫かれたのであらう。この基本型の變化したものに「紅葉ちるまにさけのみしたるところ。まどむする身にちりかゝるもみちはかぜのかづくる錦なりけり」の如

く紅葉樹下の酒宴の場面や「人の家にきんひきふえふきてあそびしたり。笛のねは紅葉をふくに云々」の如く紅葉ある庭を前に管絃の遊したる場面があつた。山里の紅葉もこの系統に屬する構圖である。「あれたるいへにもみぢちりいれるところ」「山のふもとに家あり、もみぢ散て人なし」と云ふ様にわびしき山里は人氣無き廢屋を點することによつて一層物淋しさを加へ、散りかかる紅葉のはげしい色彩は反作用的にこの氣分を更に強化した。しかし又時には「山のほとりなる家に男女ゐて紅葉をみて遊ぶ」の如く男女をその内に置くことによつてこの山里を忽ち優しき情事の背景に蘇らしめることも出來たのである。以上が主として山野に於ける紅葉の圖であるのに對し、「秋の前栽さきみだれたる、紅葉おもしろき所」の如き前栽の紅葉があり、又水邊の紅葉を主題としたものも頗る多い。^{***}その内特に著しいのは宇治の網代に「紅葉のひまなく寄りたる」を畫いた作品であつて、「あじろにもみぢのちりいりてながるる所に人おほかり」「十月うぢのあじろに女車物みる」などがその例である。又「人家のほとりにながれたる水にくれなぬの木有」の如く人家を配した河邊の紅葉を畫いたものもある。これらは通じて紅葉に覆はれて流るる水と、これを見る人物とから成つてゐたらしい。「河わたらむとする人のもみぢのちる木のもとにむまをひかへてたてる」の如く騎馬の人物もあれば、前引の題に見ゆる乗車の婦人もあり、稀には「人々舟にのりてあじろにいけり」の如く船に棹さして來る場合もあつた。水邊の紅葉はひとり川とは限らない。「紅葉ひまなく散かかり瀧おちたる山のもとに人々あまたみたる所」の様に紅葉山中の瀧を、「池水にもみぢちりうかぶ、水鳥あり」の如く水鳥ある池上に浮ぶ紅葉を、「山里の人の家に釣殿あり、水の上に木葉ながる。そまちかき所ならずば行水ももみぢせりとぞ驚かれまし」の如く山里の別墅の庭池に浮ぶ紅葉を、「やりみづにもみぢうきてながる」の如く庭園の遣水に流れる紅葉も夫畫材となつてゐるのである。最後に稍異色ある圖様を一括して考へてみるに、第一に月下の紅葉がある。^{***}「常よりもてりまさるかな山の端のもみぢをわけて出る月影」「もみぢちり残りたる山

の峯に月の人たる所」「月のおもしろき夜もみちをみて人々ゐたり」は何れも月光に照らされたる夜景の紅葉を畫いてゐる。第二に「紅葉の山にみちてしぐれのふりそゞおつる」の如く時雨下の紅葉を畫いたもの、これは菊の場合にも見られたと同じ手法であらう。第三は「木ずるに残たる紅葉に雪かゝりたる」とある如き雪下の紅葉、これは冬に入つて猶散り残つた紅葉樹の梢に雪を置いたさまを畫いたもので、晩秋初冬の交錯した風物を示さうとした機智的構圖とも云ふべきではあるまいか。

* 七四、九五、一五九、一六〇、一七五、二三〇、二五〇、三〇五、三一三、三二九、三五五、三九八、四二六、四四七、四六九、四八六、五三一、六〇四、七五九、八六八、八七六、八八七、一〇一〇、一〇七七、一一三六、一一五四、一一八〇、一二四二、一三八四、一四〇一、一四〇四、一四八一、一五一五、一五七八、一六七五、一七〇七、

** 一六九一、

*** 七〇、七一、九〇、九三、九四、一〇四、一五八、二〇九、二四五、三二五、三三六、三九九、四一二、四六六、四八七、五二〇、五三三、五三四、五三五、五四〇、五六〇、五七七ノ二、六三四、六五二、六九一、七〇三、七二三、七三五、九二三、九五一、九七五、九八〇、九八七、九九四、一〇二二、一〇二三、一〇二六、一二二二、一二三三、一二四八、一二八二、一三五四、一四三八、一四八二、二一六〇、

**** 二〇五、二四二、一一九七、一二〇一、一三八二、

***** 二一二、五七七、六七九、八〇一、

***** 一一九八、一九〇七、

萬 「海にのぞみたる松につたのもみぢのかゝりたる」と云ふ圖様であつた。

榮花物語に、長和二年九月東三條第行幸の際の庭の風光を敘して、「なかじまの松のつたのもみぢなど、つねのとしはいとかうしもあらねど、よのけしきにしたがふにや、いみじくさかりに、いろ／＼めでたくみゆ云々」とある通り、松にかゝれる萬の紅葉は當時特に人の賞美する處であつたのである。

* 一七〇八、一七六七

秋田 秋の田家圖は云ふ迄もなく收穫のいとなみのさまに取材したものである。或は豐熟の「田まぼる家に人ゐたる所」或は「ひたはへたる所」即ち鳴子を引く光景、或は「田かるところ」或は「おきないねはこびつます」さま、又はその收穫の「いねかりほせる」ところ、更にこれらの光景を駒とめて見る旅人などが畫かれてゐる。中には「九月中の家のいねをとるに、かりする人のまうできたる、女ども侍るに」の如く、狩する人と女とを配して單なる農村圖に男女の人事を添へて貴族的趣味を加へたものも作られた。四天王寺扇面寫經下繪の中に貴族の服裝をした女が屋内より鳴子を引くさまを畫いた一枚がある。

* 九二、一四〇、一七八、三二八、四一三、五〇〇、七六一、七八二、七九八、八三六、九三二、一〇六九、一一七二、一二三二、一三四四、一五一二、一五五五、一七七四、二二六六、参考一〇

(四) 冬の景物畫

冬川 「始の冬網代の上におきなをり」は既に紅葉も過ぎたらう寒い網代に氷魚を守る老翁の姿を畫いて、初冬の蕭條たる情景を示したものであらう。又「思ひかねいもがりゆけば冬の夜のかはかせさむみちどりなくなり」は千鳥なく河邊を歩む男の姿を、「十月あしかりつみたる所。なにはめの衣ほすとしてかりてたくあし火のけふりたゝぬ日ぞなき」は有名な難波の蘆刈を畫いたものである。稻刈が豐熟の秋のよろこびを示すのに對し、茅屋に焚かんがため刈り積まれた蘆の束は佗びしい冬の感じを表現するに適してゐた。この外宇津保物語嵯峨院太后六十賀屏風に「十月網代ある河原に船どもこぎ浮けたり」と云ふ畫題が見える。

* 一四六、六三七、七六二、八三七、一三二七、参考一一、

時雨 時雨の繪として最も多く行はれたのは途上に時雨に逢ひ袖をかがいて行く人物を畫いた圖面であつた。「十月かものやしるにまうでてかへる人道のなかにてしぐれにあへり。かくるべき木の葉なければ神な月時雨に袖をぬらし

てぞ行」むまにのれる人河をわたるに時雨のすれば袖をかづく、もみぢする所」はその代表的な例で、前者は徒歩の後者は騎馬の人物を夫々畫いたものである。次に「ゑにあらたるところにしぐれふる。をとこきたり」の如く、男女の情事の背景としての時雨の繪がある。それは孤獨なる女の住居に一層わびしさを加へる景物となつたことと思ふ。

* 一一三、二四八、二四九、三七〇、五二二、五八五、一一三一、一一七四、一二五〇、一四八六、

臨時祭 「十一月りんじのまつり」「臨時祭したるかた」などあるは、寛平元年に初り爾後毎年十一月下酉の日に行はれた賀茂臨時祭の圖の謂であつて、群書類従本源順集に「十一月加茂臨時祭みる車」、歌仙家集本忠見集に「十二月りんじのまつり見る車あり」とあるによつて、祭を見る車を畫いた圖様であつたことが分る。猶萬代集に「法成寺入道前攝政家屏風に石清水臨時祭を」と題する歌があるが、「色かへぬ山あゐの衣」などと云ふ歌句から推すに、三月に行はれる石清水臨時祭とするよりも、むしろ十一月の賀茂臨時祭を畫いたものと考へるのが適當ではあるまいか。猶年中行事繪卷卷十九は賀茂臨時祭を畫いたものとされてゐるが、模本頗る粗略であつて、情趣豊かな障屏畫の圖面をしのぶ手ばかりとはなり兼ねる。

* 一九七、三七一、五四四、六五五、六九二、九五二、一〇五一、一六八一、一七三四、

神樂 「かぐらし侍る。みや人のたける庭火のおきあかし聲々あそぶ神のきねかも」「小夜ふけて霜はおけども山人のおれる柿の色はかはらじ」「十月神樂したる所、庭火たける」など見える畫題は、霜氷る夜半にかけて莊嚴なる庭燎に照らされながら行はれる神樂を畫いたものである。十一月の季に配せられてゐるのは、それが賀茂臨時祭の還立の神樂であるからであらう。枕草子に賀茂の臨時の祭はかへりだちの御神樂などにこそなぐさめらるれ。庭火のけぶりのほそくのぼりたるに、歌の聲もいとあはれにいみじう面しろく、

寒くさえ氷りて、うちたる衣もつめたう、扇もちたる手もひゆとおぼえず。才の男召して、こゑひきたる人長の心ちよげさこそいみじけれ。里なる時は、ただわたるを見るが飽かねば、御社まで行きて見るをりもあり。大いなる木どものもとに車をたてたれば、松のけぶりのたなびきて、火のかげに半臂の緒、きぬのつやも、晝よりはこよなうまさりてぞ見ゆる。橋の板をふみならしつづ、聲合はせて舞ふほどもいとをかしきに、水の流るる音、笛の聲など合ひたるは、まことに神もめでたしとおぼすらむかし。(内閣本に據る)

と描寫されてゐる通り誠に趣深いものであつて、ことに「晝よりはこよなうまさりてぞ見ゆる」と云ふ夜景の視覺的美感がこれを繪畫の好題目とした所以と思はれる。

* 一九五、四〇〇、五二一、五八四、七七六、八一、八八五、九九五、一一二六、一二二〇、一二八五、一五六九、一九〇三、

冬神詣 「十一月高山有古社、人々參詣」と云ふ畫題がある。「霰ふる峯の山べの神葉にゆふかけてこそくればかへらめ」と云ふのもこれに類する繪であるらしい。同じ物語でありながら女の寺詣の和やかな春景の圖に對して、ここでは高峻な山と冴えた霜月の空と、神祠の古びとが全く別箇の空氣を構成してゐたことが観察される。

* 七一九、一一九九、一七二六、

神祭 「十一月神まつる家」「山ざとに神まつる」「いやしき人神まつる」などあるは私人が家に神を祭る光景を圖したもので、「山ざと」とか「いやしき人」とかの句から推して、恐らく身分いやしき人のささやかな茅屋に神を供へていはふさまが畫かれてゐたのであらう。私人の神祭については考ふべき十分の史料を缺くが、早く寶龜二年の正倉院文書に寫經所の下級の官人が「爲私神祀奉」めに暇を請うてゐる事實(大日本古文書六の一七〇頁)から見ても、上代を通じて個人的な神祭の儀は、朝廷や神社に於ける公式の神事と相並んで永

く行はれたことが考へられる。かゝる國民的な敬神の史實が畫題となつてゐることは神祇史の上からも注意に値する處と思ふ。

* 四九〇、五四三、一二三四、一五七九、一六八二、二一六五、

野の行幸 野の行幸とは大原野に行幸あらせられて鷹狩を行はせらるるを謂ふ。「野の行幸かきたるところ。御狩する野への冬草風になびきはるけくみゆるしめのうち哉」「鳥やかへるましろの鷹をひきすへて君が御狩にあはせつるかな」とあるによつて大體その構圖を察することが出來よう。延暦十一年數回に涉つて「遊獵大原野」と類聚國史に見えるのを初めとして、大原野行幸は歴代屢々行はせられたのであるが、就中醍醐天皇の御代の行幸の御模様について、大鏡に左の如き詳細な敘述がある。

野行幸せさせ給しに……さて山ぐちいらせ給し程に、しらせうといひし鷹の、とりをとりながら、御こしの鳳のうへにとびまいりて候し。やうやう日は山のはに入方に、光のいみじうさして、山の紅葉錦をはりたるやうに、鷹の色はいとしろく、雉は紺青のやうにて、はねうちひろげてゐて候し程は、まことに雪すこしうち散て、折節とりあつめて、さることやは候しとよ、身にしむばかり思給へし……

紅葉したる山を背景として白雪降り初めたる空に逐ふ鷹の羽の純白と、逐はるる雉の羽の紺青とが鮮やかな對照をなし、これを窺覽あらせらるる主上の御乗輿の金鳳が夕陽に輝くさまは、さながらに美しき一幅の繪であつた。繪畫の素材として見逃されなかつたのも亦宜なる哉である。猶この大鏡の記事はこの畫題の圖面を推測するに當つても極めて具體的な資料となることを忘れてはならぬ。

* 一六七八、一六七九、

大鷹狩 大鷹狩は冬の鷹狩を云ふ。この題歌には「霜がれ」の草又は野を詠んだもの多く、「寒風獵々草枯辰、牽犬呼鷹起野塵」の詩句にある通り、霜枯れの野に鷹犬を携へて狩する人物を畫いたものが最も多かつたらしい。又山

里を背景としたものに「十月山ざとにたかすへて人きたり」の如きがあり、「こまなめてかりそめと行は朝ぼらけ松風寒く雪降にけり」「雪のあした鷹狩したる所」の様に雪を畫き添へたものもあつた（前項所引の大鏡の記事参照）。稀には「海づらに鷹すへたるたび人、雪降る」の如く海岸を畫いた例もある。

* 一九六、三四二ノ二、四八九、八一二、九二四、一三二六、一三四五、一三六五、一五一一、一六八七、一七一〇、一七七二、一九〇九、

枯野・野火 大鷹狩の舞臺となつた枯野が主題となると、「野やどりせるたび人。しもがれの草まくらには君こふるなみだのつゆぞおきまさりける」の如き枯野に宿る旅人の望郷の懷ひにとざされた姿を畫く寂しい畫面となつた。^{*}又「冬野やく所。さわらびやしたにもゆらむ霜枯の野原のけぶり春めきにけり」の如き野火の繪ともなる。^{**}而してここには、萬物凋落の世界である冬枯の野が野火に焼き盡され、たちのぼる烟に新らしい生命の萌え出づる春への轉換を象徴するものが感ぜられてゐるのである。

* 七二四

** 一〇六五、一五二〇

旅人 右に似た畫題に「十一月たび人。何にかは急ぎもゆかん夕暮にあすもこえなん山にやはあらぬ」の如きものがある。冬の山道を急ぐ旅人の姿を畫いたものと思はれる。^{*}序に「旅居のかたある所。草枕旅の宿りの露けくば拂ふばかりの風も吹かなむ」と云ふ野宿の景、「山みれば近くきぬるをふるさとはいつともしらで待や渡らん」と云ふ旅人望郷の景などを畫いたものなどをここに附載して置く。^{**}

* 一三四六、一五一四、

** 五四九、一一三三、一六〇四、一六九八、

山里 「十一月あれたる家女ことひく、おとこきてとひとり」の様に冬の山里に獨居して琴を弾じてゐる女を男の訪れる情景を畫いたものがある。「山里は冬ぞさびしさまさりける」と古今集の源宗于の歌にも詠ぜられてゐる通り、

冬の山里はことにわびしいものであるが、その冬の山里、又は「あれたる家」と云ふ様な背景の裡に咲き出でた女の姿は特に對比の著しいものがあつたに相違ない。しかしこの對比と雖も決して奇なものでなく、更級日記の著者菅原孝標の女が少年時代ののぞみに「かたちありさま物がたりにあるひかる源氏などのやうにおはせむ人を年にひとたびにてもかよはしたてまつりて、うき舟の女君のやうに山ざとにかくしすへられて、花紅葉月雪をながめていと心ほそげにためたからむ御ふみなどを時々まち見などこそせめ」と云ふ世界を夢みてゐたことを想起するならば、前記の如き情景が王朝人士の心を云ひ難いなつかしさを以て吸引したものであつたことが考へられるのであつて、さてこそ「ころぼそげなるやまざとにをんなのながめたる。このはちりさりさびしさまさるやまざとにおとなふ物はみねの松風」と云ふ如き繪が扇面に畫かれる程愛好された所以も理解されるのである。ひとり女が畫かれたばかりでなく、「山郷ノ心細氣ナル水ナド流レテ物思タル男ノ居タル所ナガレクル水ニカゲミム人シレズモノオモフ人ノカホヤカハルト」の如く思ひに沈む男の姿も畫かれた。この「水ナド流レテ」とあるは山里の自然を示す特徴的な手法であつたと見え、他にも「やまざとにみづあるところにもら人のきたり」と記されてゐる例がある。「山づらにけぶりとつ家あり。野に雉ども有、道行人たちとゞまりてみたり」と雉を添へて季を示し、又家にけぶりを立ちのぼらせて一層の寂寥感を加へた作品もあつた（あまの家の烟にせよ、すべていやしい民屋に上る細いけぶりはかう云ふ感情に訴へる處があつた様に思はれる）。而して山里の寂寥感「山里の人も住まぬわたりかきたる。牡鹿ふすしげみにはへる葛の葉のうらさびしげに見ゆる山里」と云ふ一切の人間的ないぶきを拂拭し去つた状態を畫くに至つてその極に達した模様である。猶山里なる天地が平安朝の貴族の精神生活にとつて如何なるはたらきをなしたものであつたか、それが歴史的に如何なる意義を擔ふものであつたかについては、別の場所で少しく立入つて考へてみたいと思ふ。

* 四六一、五五四、一二四四、一二四五、一三三二、一三四五、一三六六、一四九五、一五二九、一六七二、一七二四、一九九三、

猶「あれたる家のむねに草や木などおひしげりたる下に家あるじとおぼしき人のおいたるかたかける所。我宿のかはらの松の木高きに云々」と題する作品がある。屋根に葺むす古屋と屋内の老翁の姿とは相俟つてそこに深い閑寂の氣を堪へてゐたことであらう。既にそこには中世的な「さびたけたる位」（禪竹「至道要抄」）に近いものが感じられたかもしれない。それは山里の閑寂に似て更にこれを越えた境地であつたと想像される。

* 二一〇三、

氷池付水鳥 「ふゆこほりしたるいけ。こほりぬるいけのみぎははみづとりのはかぜになみもさはがざりけり」と氷した池に水鳥を書き添へて庭園の冬景色が表現された。「十二月前池雪降、水鳥群居。池水の氷につどふをしのうへにつく」とある今朝の白雪の如く更に氷池の上に雪の降り添ふ景色も畫かれてゐる。紫式部日記に「御前の池に水鳥どものひび／＼におほくなりゆくをみつ、いらせ給はぬさきに雪ふらん、このおまへの有さまいかにおかしからんとおもふ」とあるによつて、この景色の時人の特に好む處であつたことが知られるのである。水鳥はこの歌にある通り鴛鴦か或は鴨、鵝等であつたらう。時には「冬の夜のいけの氷のさやけきは月のひかりのみがくなりけり」の如き氷池を照らす月夜の景も畫かれた。

* 五二三、一〇一二、一〇七八、一一七五、一四二四、一五四三、一四、一七二七、

冬の池ではないけれど、水鳥の繪は好んで畫かれたらしく、高倉天皇が御屏風に水鳥雁などを畫かしめ給うたことが昇遐記に見え、現存の遺品では藤原清衡奉納中尊寺紺紙金銀泥經見返や、後世の作品ながら狹衣繪卷、春日權現驗記俊盛邸段等に池に遊ぶ水鳥の群が畫かれてゐる（遼陵東陵壁畫山水中の春景に倭繪にでもありさうな水禽の畫かれてゐるのは面白い）。「女のおもひをもちてゐたるに水鳥のまへにある所を」と云ふ歌繪もある。これらに於て水鳥は單な

る自然の一景物ではなく、人間的感情の反射點として畫中に配せられたものではあるまいか。紫式部日記に「たゞおもひかけたりし心のひくかたのみつよくて、ものうくおもはずに、なげかしきことのまさるぞいとくるしき。いかで今は猶ものわすれしなん、思ひがひもなし、つみもふかりなど、あけたてばうちながめて、水鳥どもの思ふことなげにあそびあへるをみる。水鳥を水の上とやよそにみん我も浮たる世を過しつ。かれもさこそ心をやりてあそぶとみゆれど、身はいとくるしかんなりと思ひよそへらる」と記されてゐることは水鳥の畫中に於ける役割を考へる場合にも忘れてはならぬ處であると思ふ。

* 一二八二、一三五二、一九八五、二〇九〇、二二六〇、二三六〇、

雪 「雪月花」(白氏文集)「花紅葉月雪」(更級日記)などと並べられてゐる様に、雪は四時の景觀の雄をなすものであり、且亦景物に乏しい冬季の美をひとりで代表するものとして、雪の繪は最もよく畫かれた。その内にはゆきくだる所」と云ふ如く内容の明でないものもあるが、それらは多く「木の間より風にまかせて降るゆきをはるくるまでは花かとそみる」の様に非々として降り来る雪や、「春こねど草木に花のさく」が如く「木々の枝に雪の降かゝれるかた」などが畫かれてゐたらしい。ことに「世の中にひさしき物は雪の中にもと色かへぬ松にぞ有ける」「竹に雪のふりかゝれる。しら雪はふりかくせども千世までに竹のみどりはかはらざりけり」など、雪と其内に猶常緑を變へぬ松竹の貞心が好んで畫かれた様である。源氏物語乙女卷に六條院庭園の「へだてのかき」から竹うへて松の木しげく、ゆきをもてあそばんたよりによせたり」(大島家所藏青表紙本には「から竹うへて」の一句を缺くが、肖柏本及び河内本其他皆この句あるを以て今肖柏本に據つて補つた)と見える如く、當時の人々は松竹に積る雪を特に愛でたのであるから、従つて亦畫題にもよく上つたのであらう。蓋し雪の白色と松竹の綠色との美しい色彩の調和が恰好の畫材となつたことと想像される(明月記建久九年二月廿五日條にも「引物繪ニ被畫三竹雪了」ことが見える。但しかうした畫題は或は唐繪の影響があるかもしれないのである

つて、畫繼卷八銘心絶品に「王維雪竹圖」の名のあることが聯想される)。次に人事の描寫を含むものについて云ふと、或は「十二月雪おほうつもれる家。人しれず春をこそまで我宿に降つむ雪をはこぶ人なみ」の如く雪に埋もれた家が、或は「雪の庭にみてりける」の如く白銀に敷きつめられた庭が、或は「山ざとにすむ人の雪ふるを見る」「雪降りたる所に女のながめしたる所。春やくる人や問ふとも待たれけりけさ山里のゆきをながめて」「山家雪深徑路已絶、無尋來客獨以閑居。對深爐而煖醇酒、望前峯而詠古詩」の如く人跡絶えた山里に男を待つ女の姿や獨坐酒に閑を遣る男の姿が畫かれてゐる。さうしてその山家の「排戸眺望」する時、「青松列山、白鶴立汀。禪客歸寺、樵夫過門」と云ふ景觀の展開された場面もあつた。さきに荒廢した古屋に老人ある所を畫いた作品を擧げたのであるが、ここにも「かしらしろき翁ある所に雪ふる」と云ふ閑けたる畫面を想はせるものがある。次は「雪ふりたる山家たづぬる所。道もなく雪ふりにけり山里はたゞ山ひこのこたへのみして」の如く白雪愔々として道もなき山里の家に訪れ來つた人物を畫いたもの。これは雪中の訪客らしいが、又「雪のあしたまらうど門にある所」を畫いたものもあり(「雪のあした」の美は後年に至る迄最も愛せられた處で、中世に雪月花の繪卷が畫かれた時も「花夕繪、月夜繪、雪朝繪」の如く取合されたことが實隆公記明應五年二月三日條によつて知られる)。「十二月大雪のふれるに、家に男かしらに雪かゝりてゆづるはもちてきたり」と云ふ雪に濡れた訪客を畫いた興味深い作品もあつた。更に雪中の旅人の繪もある。「寒驢費策白雪中、不倦廻頭嘯曉風」の如く雪の曉馬に鞭うつて進む人物、「旅行人松の雪を見る」情景、「旅の空くるもくるしなあづまぢのゆききのかたもみえぬしら雪」の如く雪に覆はれたる街道を遙かに東國目指して進む旅人の姿などが畫かれたのである。次に全く人事から離れた山中の雪景の自然のみを畫いた例もある。「瀧の絲は皆とぢつらむよしの山雪のたかさにおとをかへつつ」などがそれで、雪にとざされた山中の瀧を畫いたものと思はれる。

* 一六一、二六八、二八六、三〇六、三三七、三四四、三五七、三七二、四二八、四四九、四六七、四九一、五二四、五三二、五四八、五六一、六二五、六五六、七二五、七六三、七七七、八三八、八六五、八七四、九七七、九九六、一〇一三、一〇七九、一一〇一、一一七六、一二三五、一四八三、一五一四、一五八〇、一七三一、一七九五、一八九八、一八九九、一九〇〇、二〇三五、二一三六、二二六六、二二六八、参考一二、参考三二、参考八二

雪はこの様にして萬物を埋め盡し、それと共に四季の變化もここに盡きるのであるが、一歳の窮る處は即ち來るべき新しい一歳の展開の始まりとする處である。この新春の訪れの希望を月次繪の最後に示したものが雪中の梅であつた。「雪ふる。ふる雪の下に匂へる梅のはなしのびに春の色ぞ見えける」と云ふ題歌はよくこの意を示したものと云へよう。然しながら歳末の梅は猶「白雪にふりかくされて」「みる人まれに」、その前に美しい女人を立たしめるには猶やがて來るべき春の日を待たねばならなかつたのである。

* 一四七、二八八、二八九、四五〇、四六八、五七八、一二六〇、

雪の繪の遺作としてはまづ四天王寺扇面寫經の下繪を舉ぐべきであらう。其處には紛雪降る中を老女笠をさして訪ひ來り、男之を迎へる光景が畫かれてゐる。鎌倉時代の作品になると、法然上人行狀畫圖卷十七、卷四十二等數箇所に見出されるのを始め、春日權現驗記や一遍聖繪にも優れた作例を見ることが出来る。ことに春日權記のそれは「木々の枝に雪の降かゝれるかた」の卓越した實例として、又一遍聖繪の奥州路の雪景は雪中の旅人圖をしのぶ好きですがとして、共に最も貴重な畫面と云はなければならぬ。

佛名 歳末に於ける年中行事として後に殘されたものに、大晦日に先だつて佛名會がある。されば月次繪に於て十二月の季として「佛名する所」を畫いたものが尠くないのである。多くは畫面について明記を缺くが、その明なものを見ると、「人家に佛名の朝に導師の歸に、法師男ども庭にあり立て遊ぶあひだに、雪ふりかゝれる梅花折」「佛名のあしたに梅の木の下に導師と主人とかは

らけとりてわかれ惜みたる所」「十二月佛名、導師にものかづく」などと、何れも個人の家の佛名會、それも會了つて後導師と別る場面を畫いたものであつたらしい。且前引の題中に明に「雪ふりかゝれる」と記してゐる外、題歌にも「かきくらしふるしら雪の」とか「としのみつる雪」とか雪に言及したものが多から、必らずや雪の降るところを畫いたものと考へられる。即ち「雪」の繪の一特殊場面とも云ふべきであらう。

* 一九八、三五八、六九三、九二五、一〇二四、一〇五二、一二四〇、一二四一、一三二八、一三四七、一四八八、一六七七、参考一三、

十二月晦日 年中行事の最後に來るものは大晦日である。「十二月晦日のかたかきたる所」の如く大晦日を畫題としたものが相當見出されるが、唯一つ忠見集に「十二月なやらふ」と追儼を畫いたことを示したものある外、畫面について明記したものは皆無に近い。纔かに「十二月晦の雪。我宿にふるしら雪を云々」と題したものあることと、前引忠見集のそれも歌仙家集本にはその下に「雪ふる」の一句が存することを併せ考へて、やはり雪景によつて歳末最後の日を示したのではなかつたらうかと推定せられる。然りとせば、これ亦雪の繪の一場景に外ならぬとすべきであらう。猶追儼の有様は政事要略卷廿九に其の圖が收められてゐるから、これに據つて想像を進めることが出来る。かくて正月元日の春景に始る月次繪の畫題は十二月晦日の雪景を以て終るのであつた。

* 一一四、二〇七、五〇一、五四五、六八一、七〇五、七六五、八三九、九五三、一一一六、一五三二、

(五) 特定季節に限定せられざる景物

四季繪を構成する畫題中には、一歳中のある時節の景氣をあらはす景物の外、何れの季に屬せしむべきか限定し難い景物も採られてゐる。松、竹、鶴、巖などがそれで、これらは季節の推移に伴つて

生じ且凋落する花紅葉の類と異り、本來四季の變遷を超えて存續する處に特色があるのであるから、特定季節に限定せられないのがむしろ當然であらう。尤もこれを月次屏風などの中に編入する場合には、例へば水邊の松を夏に配し、歳寒に常緑を保つ竹を冬に配するなど、何れかの季節と關係づけてはゐるが、松や竹自體に夏なり冬なりを代表する性質があるわけではないのである。

松 松の姿は早く扇面に畫かれた外(田氏家集)、障屏中にも多く用ゐられた。構圖の明な例として「人の家松」、「河邊の松」「まつのしたにみづやれり」の如き水邊の松、海邊の松、「松にかかれるけけを見る」ところなどがある。海邊の松は又「はまづらにまつおほくたてり」と云ふ松原の風景や、「海のほとりに松の一本ある所」と云ふ一ツ松のすがた、或は「松をのみ巡りて蜺のうへたれば千世の住家と思ふなるべし」と云ふ松に圍まれた海邊の孤屋、「松のすゑの海にひたれる所」と云ふ機智的構圖などさま／＼あつた。又「人の家に松竹あるところを畫いた松竹圖が多い。これは家の前庭に好んで松竹を植ゑた時代の趣味を反映するもので、前引源氏の六條院庭園の例や藤原兼輔の栗田の邸に「前栽に松竹など」植ゑてあつた事實(貫之集卷九)を参照すべきである。その内には「命長き人の前に松竹あり、家のほとりに菊あり」と云ふ様に長壽を意味するいろ／＼な要素を集めて來た特殊な構圖もあつた。歳寒三友の萌芽は既にここにあつたと云はなければならない。

* 六四、二二三、二七〇、二八五、二九五、三二六、三五〇、四二八、五四六、五七ノ二、五八〇、六〇一、六一〇、六六五、一一〇六、一一二九、一一八七、一四二八、一六九〇、一七〇九、一九九二、
* 一七六、六〇七、六三五、七〇四、七六四、八八四、一四五五、二三〇八、

竹 殆ど大部分が「人の家の竹」を畫いたもの、これには「蕭蕭北窓竹、窓間枕簟在」(白樂天詩集卷八思竹窓)と窓前に竹を植ゑて愛玩した白樂天の影響

があると考へられる。「窓近きときはのかげはくれ竹の云々」の顯歌に詠まれてゐる様に窓前の竹を畫いた作品のあつたらしいことがその一證とならう。又「竹のもとに花うゑたり」の如く、竹に花を畫き添へたのもあつた。「くれ竹の」「ふかき緑」を花の紅と對比させて色彩の單調を破る効果があつたに相違ない。

* 一一五、二二九、二六八、四〇九、四二七、四八八、六二〇、六二五、八六六、八六七、八七一、一一五五、二二五二、參考八二、

鶴 植物に於ける松竹に比すべきものが動物にあつては鶴龜である。鶴の圖は支那繪畫に多く先例があつて(宣和畫譜卷十五花鳥、杜詩卷十一畫鶴等參照)、現に我が國に黄筌の竹鶴の如き古い作品が傳はつてゐるが、支那の鶴圖が花鳥畫として取扱はれたのに對し、我が國では何處迄も景物畫乃至風景畫として畫かれたのであつて、例へば「道行人河のほとりに鶴むれ居たるを見る」とある如く人物迄添へて單なる花鳥畫風の鶴圖に終らしめてゐない處に相違がある。その構圖には「鶴雲むにあそぶ。大空にむれたるたづの云々」「かはのほとりにつるのむれゐたる所」「田舎人の家の前の濱づらに松原あり。鶴群れて遊ぶ」など、或は大空に飛び、或は河邊、或は海濱の松原に集る群鶴の態や、「いけの鶴。わが宿のいけにのみすむ鶴なれば云々」「松のすゑにつるたてり」「住の江のはまに鶴たてり」「巖に鶴たてり」の如く、或は苑池に、或は松の梢に、或は海濱に、或は巖上に(恐らく唯一羽で)佇立する場面の外、「翁の鶴かひたる處」(公任卿集。榮花物語では「人の家にちゐさきつる共おほく書たる所」となつてゐる)と雛鶴を飼育する光景などがあつた。

* 二二〇、二二一、二四六、二九四、三六七、三九七、四〇七、四三一、四八三、五九一、六〇三、六一九、六三六、六八〇、七三六、七五〇、八六四、九七三、一〇五、一一五一、一二八四、一三五二、一五二八、一六九二、二一六七、二二五八、二三五二、

龜 龜を祥瑞として尊ぶ思想は寧樂朝以來のことであるが、鶴などと違つて

畫材としてはあまり見榮えのしない動物であるせいか、作例として纔かに「田舎の家の前に川あるにそれに河龜ながる」と云ふ一つあるに過ぎない。

* 一〇二九、

巖 鶴の立つ場所としての巖は又單獨で畫題ともなる。恐らく「白浪のよする」濱邊の巖に「こけ長くおふる」さまなどが畫かれたのであらう。

* 四〇五、四〇六、一一八七、一四三六、

老人 老人の姿は菊、雪、荒れたる宿、松等の畫面の點景となつてゐる外、「春頭白き人のゐたる所」の如くこれを主題としたものもあつたらしい。^{***}ここには「春」と季が附せられてゐるので、四季繪の一部と想像されるが、これを春に配したのは鶴龜と同じく長壽の表現として祝すべき年首に置いたものらしく、本質的には勿論季を超えた存在であつた。

* 六二四、七三一、八六五、一四五五、一五二八、二一〇二、二一〇三、二三九八

** 一六八九

右の諸畫題は、「植ゑてみる松と竹とは君が代にちとせ行きかふ色もかはらじ」「紅葉せぬ草木にもにぬ竹のみぞかはらぬ物のためし成ける」「我宿の松のこすゑに住つるは千世のゆかりと思ふべなり」「君が世を何にたとへむさざれ石の巖とならむほども飽かねば」と云ふ類の讃歌を加へられてゐる處からも知られる様に、季の景物が四時の變易を表現するのに對し、季を超越して易らざる常住の生命の表現とせられてゐたのであつて、四季繪の内にありながら實はこれを超出するものであつたことを知らねばならぬ。加之これらによつて表現される常住の生命はうつろひゆく花紅雪の内にあはれを求める上代的耽美の精神に比してむしろ中世的な宗教的安住の心境と相通ふものがあり、その意味からもこれらの畫題は頗る異例

のものであつたのである。

以上の外に猶同じ屏風に畫かれてゐる他の畫題から推して明に月次繪の一であらうと推定せられながら、其季の判別し難いものや、畫題讃歌中にこれと云ふ景物を含んでゐないものも若干見出されるが、その種のもは數も尠く、内容に於ても別段重要なものは存しない様であつて、倭繪景物畫はまづ大體上に列舉した様な畫題の何れかに攝せられると見て大過ないと思ふ。既述の如く月次繪は日本獨特の對象把握の方法であつたから、宋元傳來の大陸系統の畫風に風靡せられた中世、ことに室町時代には殆どその迹を絶つに至つた。尤も山水畫を四季に分つて表現するだけのことならば必ずしも漢畫に例の無いことではない。大陸に於ても近年有名になつた遼陵東陵壁畫の如き實例あり、我が中世に於ても春夏秋冬に分つた「四時屏風」の存したことが文獻によつて知られるし(蓊菴集)、現に雪舟の四季山水圖、四季花鳥圖屏風の如き遺作が存在するのであるが、これを倭繪景物畫の單に四季を分つにとどまらず更に各季の初仲季各期を示すさまの景物を主題として季節の推移をこまやかに表現しようとしてゐるのと比較すれば、到底同日の談ではないのである。況んや雪舟のそれによつて代表せられる宋元系統の漢畫の四季山水圖の如き、其主眼とする處は何處迄も山水自體の描寫にあつて季節の表現が主ではなく、四季と云ふ形式には大きな意味が無いのであるから、倭繪四季繪とは根本から其性質を異にすると考へなければならぬ。且それらにあつては各々の季の山水が夫々單獨に自然の

不易の相を示すべく畫かれてゐるのであり、季節の推移と云ふ變易の相を寫す方に重きを置いてゐる月次繪とは其意圖全く正反對と云ふべきであらう。この様にして月次繪は漢畫の優勢化と共に後退を餘儀なくせられたのであるが、近世初期以來日本的畫風の復活に乘じ、再び姿を現はし來つたのであつた。春木家所藏十二月畫帖の如きは其先驅をなすものであり、浮世繪に於て更に顯著となつた。例へば勝川春章の十二月美人圖等風景畫にして月次繪の形式をそなへるものあり、或は廣重の四季江都名所等風景畫を四季に配當せるものあり、ことに廣重の風景畫は何れかの季の景物によつてその土地の郷土色を強く印象づけるものが多數を占めるのである。浮世繪が倭繪の日本の特質を最もよく傳承した正嫡であることは別に詳論する通りであるけれど、ここにも其の明白なる徵表を認めることが出来るであらう。